

過疎地中学校教師のセクシュアリティに関する教育への取り組み

Approaches to Sexuality Education Employed by Junior High School Teachers in Certified Underpopulated Areas

西頭 知子, 佐々木 くみ子, 佐々木 綾子

Tomoko Nishito, Kumiko Sasaki, Ayako Sasaki

キーワード: 過疎地中学校, 中学校教師, 性教育, セクシュアリティ教育

Key words: junior-high school in certified underpopulated areas, junior high-school teachers, sex education, sexuality education

抄録

本研究は、過疎地中学校教師の性教育への取り組みの現状と性教育に対する考えについて明らかにし、セクシュアリティ教育プログラムの検討にむけての示唆を得ることを目的に実施した。過疎地中学校6校に勤務する教師11人を対象に、現行のセクシュアリティに関する教育および、セクシュアリティに関する教育に対する考えについて、インタビュー調査を行った。インタビューで得られた言語データは、質的記述的に分析した。結果から、1. セクシュアリティに関する教育を包括的に捉えることの有用性、2. 教師間の協力、学校と専門家・地域の協力体制を作ることの必要性、3. セクシュアリティ教育プログラムを考案し、提示することの有用性が示唆された。また、過疎地では、セクシュアリティに関する教育に対する教師の意識が高いことから、より充実したセクシュアリティ教育を実施できる素地があることが窺えた。

Abstract

The present study aimed to clarify the actual condition of approaches to sexuality education employed by junior high school teachers in certified underpopulated areas and their perspectives on sexuality education in order to obtain suggestions for the investigation of sexuality education programs. An interview survey was conducted on a total of 11 teachers working at one of six junior high schools in certified underpopulated areas to investigate existing sexuality education and teachers' perspectives on sexuality education. The language data obtained from the interviews were analyzed in a qualitative, descriptive manner. The results indicated the following: 1) the usefulness of taking a comprehensive approach to sexuality education; 2) the need to establish systems for cooperation among teachers and cooperation between schools and experts as well as the community; and 3) the usefulness of devising and presenting sexuality education programs. In addition, because teachers in certified underpopulated

areas have a high awareness of sexuality education, it was considered possible to implement robust sexuality education programs in these areas.

I. はじめに

学校でのセクシュアリティ教育は、「個人の生涯を通じたセクシュアル・ヘルスの礎石になるもの」(PAHO,WHO, 2003)である。日本の学習指導要領においても,“異性の尊重”“情報への適切な対処”“行動の選択”について取り扱うこと,すなわち包括的セクシュアリティ教育が実施されることが求められているが,効果的に実施されていない現状が報告されている(橋本, 2010, “人間と性”教育研究協議会, 2006)。

近年の社会問題である若年の親による子ども虐待や, 20代女性の子宮頸がん罹患者の著しい増加等も若者のリスクの高い性行動を背景に持っており, 学校現場におけるセクシュアリティ教育の充実は急務である。とりわけ, 過疎地に住み, 進学等の理由で中学卒業後に親元を離れる子どもたちは, 性行動が活発になる時期を家族の監視や統制から離れて生活することから, 性行動におけるハイリスク群になる可能性があるといえる。

研究者は, 先行研究として, 思春期に親元を離れる子どもたちへの包括的なセクシュアリティ教育プログラムを検討することを目的に, 過疎地を対象とした中学生の性行動やセクシュアリティに関する教育の実態に関するアンケート調査を実施した。その結果からは, 思春期に親元を離れる子どもたちを対象としたセクシュアリティに関する教育には, メディアリテラシーの育成や, 自分の意思により行動を選択できることが課題として求められていることが示唆された(西頭他, 2012)。また, 教師の半数以上は, 現行のセクシュアリティに関する教育が生徒にとって“十分でない”と評価しており, 7割以上の教師が, セクシュアリティに関する教育の実施に困難感や戸惑いを感じていることが明らかになった(西頭, 2011)。

今回の研究では, インタビュー調査によりアン

ケート調査では明らかにできなかった各教師のセクシュアリティに関する教育への取り組みの詳細と, セクシュアリティに関する教育に対する考えについて明らかにし, 包括的なセクシュアリティ教育プログラムの検討にむけて, 示唆を得ることを目的とした。

II. 用語の定義

1. セクシュアリティ教育

「セクシュアリティとその表現に関するあらゆる事柄についての教育。セクシュアリティ教育は性教育と同じ内容を扱うが, 加えて人間関係, セクシュアリティに対する態度, 性的役割, ジェンダーの関係, 性的行動をとることに対する社会的圧力などの問題も扱う。また, セクシュアル/リプロダクティブ・ヘルスサービスに関する情報も提供する。対人関係の作り方や意思決定に関する技能の習得を含めることもある。」との国際家族計画連盟(IPPF)による定義を用いる。

2. セクシュアリティに関する教育

日本では, 性教育という言葉が「性欲教育」や「純潔教育」といった用語と同義で使われていた時代があり, 現代においても, 「性器教育」「性交教育」と誤って捉えられている場合がある(“人間と性”教育研究協議会編, 2006)。今回のインタビュー調査においても, 教師により語られた“性教育”という言葉は, “セクシュアリティ教育”の意味で使われている場合と, “性教育”の意味で使われている場合とがあることから, 学校で実施されている教育のことを“セクシュアリティに関する教育”という用語で統一した。なお, コードに出てくる性教育という言葉は, 教師によって語られた言葉をそのまま用いているため, セクシュアリティ教育の意味で使われている場合も含まれる。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象

へき地が多い地域であるA県とB県のへき地校指定中学校6校に勤務する教師11人。サンプリングは便宜的サンプリングとし、中学校の学校長に対し、予め研究協力を依頼し承諾を得た。その後、対象となる教師に対し、改めて研究を依頼し、同意を得た後に面接調査を実施した。セクシュアリティに関する教育について検討する委員会等を設置している学校または、セクシュアリティに関する教育に関わる担当を校務分掌に位置付けている学校においては、これらの委員または担当者を優先的に対象者に選定した。各中学校、1～3名の教師を対象とした。

2. データ収集期間

平成23年9月～平成24年1月

3. 調査方法

インタビューガイドに沿って、1人1回40～60分程度の半構成的面接を実施した。場所は、対象者の所属する施設内で、施設が指定した場所とした。対象者には、回答する際の参考資料として、中学校の学習指導要領から抜粋した「性教育（セクシュアリティ教育）に関する内容一覧」を渡した。面接内容は、対象者の許可を得て録音した。

4. 主な調査項目

面接内容として下記の項目を設定し、これらの項目について具体的な内容や実態、個人の考え等について、自由に話してもらった。

1) 現行のセクシュアリティに関する教育について

- ・実施形態
- ・実施内容
- ・実施に際して、考慮されている地域の特徴とその内容
- ・学校以外の地域で実施されている活動
- ・学校が、地域や家庭と連携して行っていること
- ・卒業後、親元を離れた生徒を支える体制の有無とその内容
- ・教師個人の取り組み

2) 思春期で親元を離れる生徒のためにセクシュアリティに関する教育として必要だと考えること

3) セクシュアリティに関する教育に対する考え

4) セクシュアリティに関する教育の実施における課題

5. 分析方法

録音内容から逐語録を作成し、言語データとした。言語データは、以下の手順に沿って、質的記述的に分析した。まず、研究目的に対する回答ひとつのみを含む句、文章を記録単位とし、1人の回答全体を文脈単位とした。次に、記録単位の意味内容を損なわないように簡潔な一文にコード化し、コードの意味内容から同質性・異質性に基いて分類集約、カテゴリーとして意味内容を示す言葉を命名した。正確性の確保のため、プロセス全体において研究者間で合意が得られるまで検討した。

6. 倫理的配慮

本学医学部の倫理審査承認後、対象地域の公立中学校校長へ調査協力を依頼した。その後、対象となる教師に対し、改めて研究を依頼し、同意を得た後に面接調査の対象とした。対象者には研究の意義・目的、調査協力は自由意思であり協力しない場合も不利益を被らないこと、プライバシー保護の厳守、データは研究目的のみで使用する事を説明し、また、インタビュー開始後でも、いつでもインタビューを中断できることを保障した。

Ⅳ. 研究結果

1. 現行のセクシュアリティに関する教育について

1) 学校で計画・実施されているセクシュアリティに関する教育

(1) 実施形態

保健体育や道徳の授業以外では、“外部講師による講演（1回/年）”“同じ地域の小・中学校教師と保健師による思春期教室（数回/年）”“養護教諭による授業（1回/年）”“特別科目の設定（1回/学期）”等により実施されていた。

(2) 実施内容

授業で実施されている内容は、“生殖に関わる機能の成熟”や、“エイズ等の性感染症”、“性情報への対処”等が挙げられた。規定の授業以外の特別活動等で実施されている内容では、“男女の理解・男女の協力”“男女交際”“生命の誕生・

尊重”“妊婦体験”“性行為”“性被害”“ライフライン”“生徒の実状に合わせて決める”等が挙げられた。

2) 教師個人の取り組み

教師の、セクシュアリティに関する教育の取り組みについては、35コードから14個のサブカテゴリと9個のカテゴリが抽出された。9個のカテゴリは、《授業以外での意識的な関わり》《協力による

積極的な取り組み》《消極的な態度》《関心の低さ》《自分なりの実施》《教育のやりがい》《少人数教育の利点》《更なる充実に向けての期待》《実施の効果に対する関心》であった(表1)。以下、カテゴリを《 》，サブカテゴリを< >，コードを[]で示す。

《授業以外での意識的な関わり》は、[男女の差はあるが、人としては平等だということを意識して関

表1 セクシュアリティに関する教育の取り組み

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
授業以外での意識的な関わり	日常における意識的な関わり	男女の差はあるが、人としては平等だということを意識して関わる 自分の言葉で自分の意思を言えるように配慮する
	担当科目を通した関わり	国語の授業で、多様な考え方が育つように配慮している 理科の授業で、生殖とか遺伝から性教育につなげる
	自身の経験を活かした関わり	母親の立場から生命誕生について具体的に話をする 母親の立場から、命について話しやすい立場にある 生徒のお母さんたちが言えない部分を話す役割を担っている
協力による積極的な取り組み	教師間での協力による積極的な取り組み	性教育の授業については、校長も交えて授業研究みたいな感じで話し合う 養護教諭と話をしながら、教育課程を組む 養護教諭が作った大枠に、関わる教師が自分の思いを入れて行う 自分たちなりに考えてやっている
	地域の協力に支えられた取り組み	学校側と村の人が一緒に話し合って、連携してやれるので、とても心強い 村と学校のつながりが強く、性教育をもっとやっていくとなったら、協力してくれると思う
消極的な態度	十分に行えていない現状	現状ではあんまり性教育はやれてない 子どもの発言に、耳を傾けてやるぐらいのことしかやってないのが実態 教師として性に関しては関わり難く、実際関わっていないのが、現状
	日常的には意識していない	性に関して生徒と接することがないので、分からない部分のほうが正直多い 普段の生活でもできたらいいが、そこまで積極的にやれてないのが現状 普段の生活では、性教育に関わることはほとんどない 性に関する話を日常のなかですることは、特にない 担任の先生も、日常的に性に関する話を意識しているという話は聞いたことない
	養護教諭に任せている	授業以外では、養護の先生が中心になって提案している 養護や保健体育の先生が中心にやってくれているため、任せている状態
関心の低さ	詳細は不明	どこまでしているかはわかりかねる 入って聞いたことないので、何をやっているかは分からない 指導案ももらっておらず、授業にも出ていないので詳しい内容はわからない
自分なりの実施	自分なりの実施	自分なりに、小学校の教科書も参考にしながら実施している
教育のやりがい	教育のやりがい	生徒の人数が少なく、反応が伝わってきやすいため、学年に応じた性教育ができて、すごく楽しい 前の学校では、今やってるような性教育は絶対取り組みなかった
少人数教育の利点	少人数教育の利点	少ない人数で密接に関われる性教育ができるところはいいところ 生徒の人数が少ないからこそ、1人1人のことを考えてあげられる強みがある 生徒全員のことを把握できるので、教師をして、喜びが多いと思う
更なる充実に向けての期待	更なる充実に向けての期待	この村の子どもにとって必要で、活発にやっていこうという認識は、教師たちの中にあると思う 養護教諭も積極的にやっているのでもっと提案したら進むと思う
実施の効果に対する関心	実施の効果に対する関心	卒業した子どもたちに、実際に役に立っているのか、心配

わる[自分の言葉で自分の意思を言えるように配慮する]等の内容による<日常における意識的な関わり>，[国語の授業で，多様な考え方が育つように配慮している]等の内容による<担当科目を通した関わり>，[母親の立場から，命について話しやすい立場にある]等の内容による<自身の経験を活かした関わり>の3つのサブカテゴリから抽出された。

《協力による積極的な取り組み》は，[養護教諭が作った大枠に，関わる教師が自分の思いを入れて行う]等の内容による<教師間での協力による積極的な取り組み>，[学校側と村の人が一緒に話し合って，連携してやれるのでとても心強い]等の内容による<地域の協力で支えられた取り組み>の2つのサブカテゴリから抽出された。

《消極的な態度》は，[子どもの発言に，耳を傾け

てやるぐらいのことしかやってないのが実態]等の内容による<十分に行えていない現状>，[普段の生活では，性教育に関わることはほとんどない]等の内容による<日常的には意識していない>，[養護や保健体育の先生が中心にやってくれているため，任せている状態]等の内容による<養護教諭に任せている>の3つのサブカテゴリから抽出された。

2. セクシュアリティに関する教育において，親元を離れる生徒に必要なだと思うこと

29のコードから，19個のサブカテゴリと9個のカテゴリが抽出された。9個のカテゴリは，《コミュニケーションスキル》《判断力》《情報教育》《親元を離れた時に必要な知識とスキル》《考える力》《多様な考え方の育成》《一般的な性に関する知識》《恋愛について》《男女の平等》であった(表2)。

表2 必要だと思うこと

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
コミュニケーションスキル	人との関係性	新しい出会いの中で，友達関係も含めてどう生きていくか 人との関わり方
	他者への思いやり	相手の気持ちを考えること
	自分の意思を伝えること	自分の言葉で自分の意思を言える イエス，ノーが言える
	困った時に相談できる	困った時に相談できる
	異性との付き合い方	正しい異性との付き合い方
判断力	自分で判断ができる	判断力 親元を離れたときに，自分で判断ができる
情報教育	携帯電話に関連した情報教育	携帯の使い方 性情報に関わる携帯電話のトラブル
	インターネットに関連した情報教育	インターネットに関連した性情報に対する判断の仕方 インターネットの裏サイトについて メディアによる情報に流されない
	情報の取捨選択	有害な情報が見分けられる
親元を離れた時に必要な知識とスキル	親元を離れた時に必要な知識	親元を離れたときに必要な知識
	トラブルに巻き込まれないための知識	トラブルに巻き込まれないための知識
	トラブルに巻き込まれた時の対処法	トラブルにあったときの対処方法
	行動に責任が持てる	親元を離れたときに，自分の行動に責任が持てる
考える力	考える力	考える力
多様な考え方の育成	多様な考え方の育成	多様な考え方を育てる
一般的な性に関する知識	一般的な性に関する知識	一般的な中学生が知ってるような，性に対する知識を最低限補う
	性感染症	性感染症
恋愛について	恋愛感情について	愛や恋について 恋愛に関する中学生独特の感情について
男女の平等	男女の平等	男女の差，生物学上の差はあるが人として平等であること

《コミュニケーションスキル》は、＜人との関係性＞＜自分の意思を伝えること＞＜異性との付き合い方＞等5つのサブカテゴリーより抽出された。具体的には、[新しい出会いの中で、友達関係も含めてどう生きていくのか][自分の言葉で自分の意思を伝える]等の内容が語られた。

《情報教育》では、[性情報に関わる携帯電話のトラブル][有害な情報が見分けられる]等の内容が、《親元を離れた時に必要な知識とスキル》では、[トラブルに巻き込まれないための知識][親元を離れたときに、自分の行動に責任が持てる]等の内容が語られた。

3. セクシュアリティに関する教育に対する考え

教師の考えは、53コードから23個のサブカテゴリーと9個のカテゴリーが抽出された。9個のカテゴリーは、《親元を離れることによる必要性》《目的意識の高さ》《更なる充実への望み》《保護者との連携》《果たすべき役割の不足感》《専門家への期待》《積極的な実施に対する疑問》《実施における戸惑い》《実施における苦手意識》であった(表3)。

《親元を離れることによる必要性》のカテゴリーは、[親元を離れたら、歯止めがないので、自分で考えて行動ができるようになる][親元を離れることを前提にして3年間を過ごさせることが課題]などの内容による＜親元を離れることを前提とした考え＞、[今そういう雰囲気がなくとも、きちんとした情報を教える必要がある][都会で、何らかの事件に巻き込まれることもあるかも知れないので]などの内容による＜親元を離れた後の心配＞の2つのサブ

カテゴリーから抽出された。

《目的意識の高さ》のカテゴリーは、[親元を離れるという意識があるから、性教育の必要性を感じられるのはいいところ][親元を離れることがなければ、性教育もこんなにみんなできり組まないと思う]等の内容による＜必要に迫られた状況における取り組み＞から抽出された。

《更なる充実への望み》のカテゴリーは、＜身近な教師による頻繁な関わり＞＜周囲の大人による関わりの充実＞＜実践的な内容の必要性＞等の5つのサブカテゴリーから抽出され、[近い存在の教師から、頻繁に訴えかけて、いろいろな知識を入れてあげたい][高校生になってからのギャップをなくすために、積極的に情報を入れておかないといけない]等の内容が語られた。

《保護者との連携》では、[性教育は、学校でもやった上に家でも念を押す][家庭で性に関する会話をする、そのきっかけ作りを学校ですればいいと思う][家庭で言えることは家庭で言ってあげてほしい]等、＜学校と保護者双方の関わりの必要性＞や＜学校の役割＞＜保護者の役割＞について語られた。

《積極的な実施に対する疑問》のカテゴリーは、＜セクシュアリティに関する教育に対する違和感＞＜内容に関する疑問＞＜必要性の否定＞等の4つのサブカテゴリーから抽出された。ここでは、[子ども同士の関わりの中で自然と入ってくることを、教師が与えることに違和感がある][個人的な疑問として、性教育に関して、そこまで教師が与えるものなのかと思う][卒業した生徒を見ても、性に関して困っている様子もない]等の内容が語られた。

表3 セクシュアリティに関する教育に対する考え

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
親元を離れることによる必要性	親元を離れることを前提とした考え	親元を離れたら、歯止めがないので、自分で考えて行動ができるようになる 知識だけは卒業するまでに、学校・家庭・地域から、入れてあげないと駄目だ 親元を離れるという意味で、困らないように指導を進めたい 親元から離れる子が大半のため、中学校の間に性教育をやっておくことが、大事 親元を離れることを前提にして3年間を過ごさせることが課題 ある程度まで突っ込んで言わないといけない この地域の生徒は、ほとんど性の情報に触れておらず、高校に入って突っ走ったり、逆に怖くなって引きこもったりしないように

	親元を離れた後の心配	ずっと村にいたら問題はないが、卒業後街に出たら、性に関する話題もたくさん出てくると思う 今そういう雰囲気がなくても、きちんとした情報を教える必要がある 都会で、何らかの事件に巻き込まれることもあるかも知れないので
目的意識の高さ	必要に迫られた状況における取り組み	親元を離れるという意識があるから、性教育の必要性を感じられるのはいいところ 親元を離れる事がなければ、性教育もこんなにみんなできり組まないと思う 親元を離れることで、これだけの性教育ができたのは、いい点だと思う
更なる充実への望み	身近な教師による頻繁な関わり	近い存在の教師から、頻繁に訴えかけて、いろいろな知識を入れてあげたい
	周囲の大人による関わりの充実	社会教育の中でも、性教育に関する教室を開催して、生徒に呼びかけてもらいたい
	更なる充実への望み	性教育の回数を増やせたらいいと思う 性に関する話を持つ機会があればいいと思う
	実践的な内容の必要性	高校に近い、もっと具体的な内容が必要だと思うこともある 妊娠したらどうなるという、具体的な話はしていない 高校生になってからのギャップをなくすために、積極的に情報を入れておかないといけない
	卒業後の支援体制の希望	卒業後も、生涯教育という感じで話し続けられればいいと思う
保護者との連携	保護者の理解	保護者の理解を一番に考えなければ、学校だけで走れない 保護者に結構ですって言われたら、それ以上のことを、職をかけてまでする気はない
	保護者の考えの尊重	性教育に関して、それぞれの考えを尊重していかなければと思う 家庭の考え方次第だと思う
	学校と保護者双方による関わりの必要性	家でどういふに話しているか、生徒がどういふ発言しているかが分かれば一番いい 性教育は、学校でもやった上に、家でも念を押す 双方からの意識付けが大切だと思う 本音で、保護者の意見と教員の意見が交換できて、そこから作り出すことができればいいと思う
	学校の役割	家庭で性に関する会話をする、そのきっかけ作りを学校でできればいいと思う 具体的な知識を必要とする話に関しては、家庭では難しいと思う
	保護者の役割	家庭では、学校で言える以上のことも言ってあげられると思う 家庭で言えることは家庭で言ってあげてほしい 学校でできるだけのことはして、家庭でできることはフォローしてもらいたい 父母の経験談などを話してもらったら、生徒の意識は上がると思う
果たすべき役割の不足感	果たすべき役割の不足感	親元から離れる生徒たちに、教師として何をしてやれるのか、難しい
専門家への期待	専門家への期待	性教育については、体育の教師よりも助産師などの専門家の方が強いと思う
積極的な実施に対する疑問	セクシュアリティに関する教育に対する違和感	子ども同士の関わりの中で自然と入ってくることを、教師が与えることに違和感がある 性教育に対して、ピンとこない
	内容に関する疑問	男女の付き合い方を学校が教えるのはどうなのか、疑問がある。
	必要性に対する疑問	個人的な疑問として、性教育に関して、そこまで教師が与えるものなのかと思う 今の年代で伝えていいのかという、自分自身の迷いがある 男子2人の学級に、性教育として、どこまでが必要なのか
	必要性の否定	卒業した生徒を見ても、性に関して困っている様子もない 学校も忙しいため、性教育の時間を増やす必要は感じない
実施における戸惑い	実施における戸惑い	どう伝えたらいいか、性教育についての考えがまとまっていない 内容を聞いた親からのクレームの話もあり、それで躊躇するわけではないが、難しいと思う
実施における苦手意識	スキルの不足	体育の教師は、大学の授業で性教育を習うわけでもなく、ウィークポイントになりやすいと思う 一般的に、教師の性教育に対する苦手意識はあると思う 性教育について、私たちは素人
	教師の羞恥心	性に関する話しはし難いため、生徒にはしない 生徒と教師お互いに、羞恥心がある
	性的話題をもつことの困難さ	話題にあがることがなく、取り上げるのは、難しい
	教師の性意識	性の話には、タブーな面もあり言い難い

《実施における戸惑い》の 카테고리では、[どう伝えたらいいか、性教育についての考えがまとまっていない]といった戸惑いが、《実施における苦手意識》の 카테고리では、[性教育について、私たちは素人][生徒と教師お互いに、羞恥心がある]等、スキルの不足や羞恥心について語られた。

4. 実施における課題

39 のコードから 14 個のサブカテゴリーと 8 個の

カテゴリーが抽出された。8 個のカテゴリーは、《内容選定の困難さ》《教師のスキル不足による困難さ》《人手不足》《担当教師の裁量に任されていることによる困難感》《教師の性意識》《生徒の性意識と発達の個人差》《養護教諭の裁量に任された性教育》《家庭における性教育の不足》であった (表 4)。

《内容選定の困難さ》のカテゴリーは、＜内容の

表 4 実施における課題

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
内容選定の困難さ	内容の深め方の難しさ	どこまで深めた性教育をすればいいか 具体的に、これだけで足るのかと思う
	生徒の発達に応じた内容選定の難しさ	何を教えるか、タイミングが難しい 女子で月経がきてない生徒がいる場合、月経については取り上げにくい 指導要領のままに教えても、理解している生徒としていない生徒の差が大きいと思う 異性への関心が高まっていない子もいて難しい 子どもの実態に合わせて、計画以外のことをするのはやり難い 生徒にとってリアリティのない話は、受け入れられないのではないかとと思う
	子どもの関心のなさ	エイズや性感染症については、生徒が興味・関心を示さない
教師のスキル不足による困難さ	教師の経験不足	若い教師が多いため、性教育の経験が少ない 性に関する授業をやり慣れていないため、惹きつけ方が難しい
	自身の教育能力に対する不安	生徒の性的発達にギャップがあり過ぎるため、きちんと指導できるのか不安 性教育について、生徒により反応が違うため、惹きつけ方が難しい 月経など、自分に経験がないことを伝えるのは、難しい エイズ感染症は、まだ生徒には遠い存在のため、うまく授業ができないのが大きな悩み 生徒にとって、リアリティのない話は、受け入れられないんじゃないかという悩み
人手不足	教師の人数が少ない	教材研究をして、指導過程を考える必要があるが、人手不足でそこまで至らない 教師の人数が少ない現実の中で、知恵を出し合い指導案を書いて実施するまで踏み出せない
担当教師の裁量に任されていることによる困難感	教師個人に任されていることによる困難感	各教師の責任でやらざるを得ないとなると、場面によってはやらないこともあり得る どんな性教育をしたらいいか、具体的に、卒業後を意識しながら考えるのは難しい 結局、どんな話をしているかわからない
	全体的な計画がないことによるやり難さ	各教師の考えに違いがあるため、3年間、生徒に学んで欲しいことがつながってないことは心配 養護教諭も教師も移動があるため、3年間バランスよく指導できることが課題と思う 実態として、色んな教師が頑張っているのは良いが、移動によりバランスが崩れるのが心配 担任の先生任せだと失敗することが多い
教師の性意識	教師の性意識	性教育はなかなかやりにくい所がある
	教師の羞恥心	やっぱり恥ずかしい 男の教師は恥ずかしい感情がでてしまい、し難いところがあると思う
生徒の性意識と発達の個人差	生徒の発達の個人差	この地域の子どもたちと町の子どもたちの性意識に関するギャップがありすぎる
	生徒の幼さ	恋愛感情を抱いたことがない、幼い生徒が多いため、授業で、その先の話しに進んでいくことが難しい 1年生の保健の内容で、恋愛について本当に理解できてるのか不安がある この地域の生徒は、異性の友人に対して兄弟・家族のような幼い感覚でいることが多く、純粹すぎて性教育をしづらい現状がある
養護教諭の裁量に任された教育	養護教諭の移動により、途絶える教育	性教育の講師を招く話しは、養教の異動で途絶えてしまった
家庭における教育の不足	家庭における教育の不足	昔は、家庭で子どもに対して性に関して話していたが、最近は上手く行えていない

深め方の難しさ><生徒の発達段階に応じた内容選定の難しさ><子どもの関心のなさ>の3つのサブカテゴリーから抽出された。具体的には[どこまで深めた性教育をすればいいか][異性への関心が高まっている子もいて難しい][エイズや性感染症については、生徒が興味・関心を示さない]等の内容が語られた。

《教師のスキル不足による困難さ》のカテゴリーは、<教師の経験不足><自身の教育能力に対する不安>の2つのサブカテゴリーから抽出され、[性に関する授業をやり慣れていないため、惹きつけ方が難しい][生徒の性的発達にギャップがあり過ぎるため、きちんと指導できるのか不安]等の内容が語られた。

《担当教師の裁量に任されていることによる困難感》のカテゴリーでは、[結局、どんな話をしているかわからない][養護教諭も教師も移動があるため、3年間バランスよく指導できることが課題と思う]等の内容が語られた。

V. 考察

1. セクシュアリティに関する教育への取り組みの実態

対象校6校のうち5校で、地域の保健師や外部講師による講演や授業が実施されていた。インタビューでは、セクシュアリティに関する教育が、教師間や地域の協力で支えられて積極的に取り組まれていることが語られており、さらに、専門家への期待や教師以外の周囲の大人による関わりの充実への望み、セクシュアリティに関する教育のより実践的な内容の必要性(表3)等が語られたことから、セクシュアリティ教育において、教師以外の大人が果たす役割を示し、プログラムに組み込んでいくことも有用であると考ええる。また、教師は、教育内容について親からクレームがくることを気にかけ、それが実施における戸惑いや苦手意識にもつながっていると考えられる(表3)ことから、学校と地域・家庭が連携し、セクシュアリティに関する教育に対する共通認識が図られることで、教師の戸惑いや苦手意識の軽減にもつながるのではないかと考える。

教師は、セクシュアリティに関する授業以外でも、日常の学校生活や担当科目の授業において、セクシュアリティに関する教育を意識して生徒と関わっていた(表1)。教師が、普段から男女の平等性を意識して生徒と接していることや、担当科目を通して多様な考えが存在することを生徒に示していること、また、自身の出産や子育ての経験を活用していることも語られた。この結果からは、教師がセクシュアリティに関する教育を、性的役割、ジェンダーについて、人間関係、他者の理解等を含めた“セクシュアリティ教育”として包括的に捉え、実践していることが示された。教師が、親元を離れる生徒に必要なと思うセクシュアリティに関する教育の内容についても、《コミュニケーションスキル》《判断力》《情報教育》《一般的な性に関する知識》《恋愛について》等が挙げられており(表2)、このことから教師が性教育を包括的に捉えていることがわかる。

しかし一方では、教師が授業以外ではセクシュアリティに関する教育を意識していないことや、実施されているセクシュアリティに関する教育は、養護教諭や保健体育教師等、担当する教師に任されていること等、セクシュアリティに関する教育に対する消極的な態度も示された(表1)。消極的な態度では、《十分に行えていない現状》として、[教師として性に関しては関わり難く、実際関わっていないのが、現状]との内容が語られており、教師が性教育を性行動などに限局した狭義の意味で捉えていることが窺われた。また、セクシュアリティに関する教育として実施されている内容を把握していない等、関心の低さも示されており、教師個々のセクシュアリティに関する教育に対する意識の差が明らかになった。

過疎地の特徴としては、少人数教育であることの利点が活かされた実施により、教師はやりがいを感じ、また、更に充実した教育が可能であると考えていたが、同時に過疎地で教師の人数が少ないことから、《人手不足》による困難感も語られた。

2. セクシュアリティに関する教育に対する考え

中学校卒業後に生徒が親元を離れるという特徴により、教師がセクシュアリティに関する教育の

必要性をより現実的に捉えていることが示された(表3)。また、このような特有の状況から、セクシュアリティに関する教育に対する教師の目的意識が高まり、その結果、充実した教育が行えていることが示唆された。このことや、前述した過疎地中学校の特徴である少人数教育の利点が活かされた実施により、教師がやりがいを感じ、更なる充実への望みを持っていたことから、対象の中学校のような特徴をもつ学校では、より積極的にセクシュアリティに関する教育を実施できる素地があることが窺え、過疎地中学校を対象としたセクシュアリティ教育プログラムを開発することの意義が確認できたと考える。

しかし、一方では、セクシュアリティに関する教育に対する違和感や、内容・必要性に対する疑問、実施における戸惑いや苦手意識が語られ(表3)、ここでも教師個々の意識や捉え方に差があることが明らかとなり、このことが、教育の取り組みの差となって表れていることが考えられる。

また、セクシュアリティに関する教育の取り組みにおいては、教師が自分なりに工夫しながら行っていることが語られたが(表1)、一方で、実施が教師個人に任されていることや全体的な計画がないことから、困難感を感じていることが示された(表4)。セクシュアリティに関する教育は、学習指導要領においても取り扱うことの必要性が明記されているが、取り組みの具体化は各学校の自由裁量に任されており、ミニマムスタンダードが決まっていない。このことから、実施する教師の負担が大きいことが考えられ、セクシュアリティ教育プログラムを考案し、提示することの有用性が示唆された。

さらに、教師は自身の教育能力に対する不安をもっていることも示された(表3)。「《実施における苦手意識》として、[体育の教師は、大学の授業で性教育を習うわけでもなく、ウィークポイントになりやすいと思う]、[性教育について、私たちは素人]等の内容で語られており、教師は性教育を専門外の内容として認識していることが考えられた。先行研究(愛媛県性教育実践推進検討委員会他、2008)では、学校でのセクシュアリティに関する教育推進におけ

る課題として、「性教育の研修会が少なく、勉強の場がない」ことが挙げられており、就職してからでも教師がセクシュアリティに関する教育について学ぶ機会が少ないことが、実施における困難感や苦手意識に影響している可能性が考えられる。学校でのセクシュアリティ教育が十分に実施されるための前提としては、教師がセクシュアリティについて学べる機会を作ることも必要である。

また、「《実施における戸惑い》」「《実施における苦手意識》」において、[生徒と教師お互いに、羞恥心がある][性の話には、タブーな面もあり言い難い][内容を聞いた親からのクレームの話もあり(略)]といった内容が語られており、セクシュアリティに関する教育を、性器や性交、性欲を中心とした狭義の意味として捉えていることが苦手意識や戸惑いにつながっていることも考えられた。セクシュアリティに関する教育を“セクシュアリティ教育”として包括的に捉えることで、それぞれの教師が専門科目や得意分野を活かして取り組み、包括的な内容を提供できるようになるのではないかと考える。

VI. まとめ

今回の調査から、過疎地中学校における包括的なセクシュアリティ教育プログラム検討に向けて、以下の示唆が得られた。

1. セクシュアリティに関する教育に積極的な教師は、セクシュアリティに関する教育を包括的に捉えており、セクシュアリティに関する教育に消極的な態度の教師は、セクシュアリティに関する教育を狭義の意味で捉えていた。このことから、積極的なセクシュアリティ教育の実現には、教師がセクシュアリティに関する教育を包括的に捉えることが重要であることが示唆された。
2. 教師間の協力および、学校と専門家、地域の協力体制があるところでは、セクシュアリティに関する教育が積極的に実施されていることから、協力体制を作ることの必要性が示唆された。
3. セクシュアリティに関する教育の実施が、教師の自由裁量に任されており、教師の負担が大きいことが考えられることから、セクシュアリティ教

育プログラムを考案し、提示することの有用性が示唆された。

また、過疎地では、性教育に対する教師の意識が高いことから、積極的に性教育が実施されている可能性があり、今後、より充実したセクシュアリティ教育を進めていける素地があることが窺えた。

謝辞

本研究に際し、研究の趣旨をご理解いただき、研究にご協力くださいました調査中学校関係者の皆さま、貴重な時間をさいて回答してくださいました先生方に感謝いたします。

本研究の一部は、第32回日本看護科学学会学術集会(2012年11月)にて発表した。

文献

愛媛県性教育実践推進検討委員会, 愛媛県教育委員

会(2008):学校における性教育の実態調査報告書.

橋本紀子(2010):『Sex Education』誌にみられる欧米の性教育の動向—中・高校生を中品に, 教育学研究室紀要:「教育とジェンダー」研究, 8, 60-68.

西頭知子(2011):平成21年度～平成22年度科学研究費補助金(若手研究B)研究成果報告書「山間過疎地に住む中学生と中学校教員のセクシュアリティ教育に関する調査研究」.

西頭知子, 佐々木くみ子, 末原紀美代(2012):過疎地に住む中学生の性行動と性意識に関する調査研究, 母性衛生, 53(1), 81-88.

“人間と性”教育研究協議会編(2006):新版人間と性の教育 性教育のあり方, 展望1, 大月書店, 東京.

PAHO, WHO(2000)/松本清一, 宮原 忍(2003):セクシュアル・ヘルスの推進—行動のための提言, 財団法人日本性教育協会, 東京.